

<活動報告>

OSCE を活用したフィジカルアセスメントの 技術試験の取り組みと学生の振り返りからみた課題

柏木ゆきえ 小林由美子 野里 同 小坂未来 三浦まゆみ
岩手医科大学看護学部

要旨

近年、臨床実践能力を育成する教育が重要視されており、それを適切に評価するために、客観的臨床能力試験が導入されている。A 大学は、自己学習の促進・看護実践能力の評価と育成を目的に、人的資源と時間を考慮した実現可能な方法を取りながら、OSCE を活用したフィジカルアセスメントの技術試験を試みており、学生の振り返りから教育効果を検証した。その結果、選択式質問の結果と自由記述の結果を合わせて、多くの学生が「緊張」を感じていたことが明らかになった。その一方で、実践力向上に対する動機付けとなったという意見も多く、試験への取り組みを通して、自己学習の促進がされ、看護実践能力の向上につながっていることがわかった。

キーワード：看護実践能力、フィジカルアセスメント、客観的臨床能力試験

はじめに

1. 背景

現在、入院期間の短縮、在宅医療・外来医療の進展、地域包括ケアシステム構築など医療提供体制は変化し続け、複雑で変化に富んだ世の中で生活する人々の健康を支援するため、看護者に求められる役割や能力は多岐に及んでいる。こうした中、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」では、看護学学士課程卒業時まで身に付けておくべき必須の看護実践能力について、その修得のために必要な学修目標が示され（文部科学省、2017）、これを受けて各看護系大学の取り組みが求められている。

臨床実践能力を育成し、それを適切に評価するために、近年、医療系教育では、客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：以下 OSCE とする）が導入されている。OSCE は、筆記試験では測ることのできない臨床で求められる技術や態度など精神運動領域の評価法として優れており、学習者の学習態度に影響すると言われている（伴、1995）。日本の看護教育では、OSCE 実施による教育効果として、「自己の学習課題を見つけることを助ける」、「課題の

解決に向けて必要な行動を取ることを培う」、「主体的な学習姿勢の習得」があると言われている（中村、2011）。また、海外の看護教育の中でも OSCE が実施されており、「臨床能力の評価方法として信頼性・妥当性が高い」、「学生の自己学習の質の向上」、「総合的な思考力および技術の向上」、「学生が評価を建設的に受け止めることができる」といった効果が確認されている（高井、2014）。

OSCE で総合的な臨床能力を偏りなく評価するには、広い範囲の出題が必要とされているが、それには多くの人的資源と時間を有し、実施が難しいという問題があり、小規模の OSCE から導入していくのが実際的であると言われている（伴、1995）。看護教育では OSCE は必須要件ではなく、各大学の任意の取り組みであり、堀込他（2015）の全国看護系大学（191 校）の OSCE 導入の現状調査結果では、47 校の回答のうち「導入している」との回答は 6 校であった。そして、対象学年は 1・2 学年で技術評価が多く、模擬患者の活用は 6 校中 3 校との報告がされている。

A 大学でも、複数の課題について複数のステーションを設置して実施することや模擬患者の活用は現状で

は難しい状況にある。そのため、課題を1つに絞り、患者役をシミュレーターとした方法で、自己学習の促進・看護実践能力の評価と育成を目的に、OSCEを活用したフィジカルアセスメントの技術試験を試みている。この評価方法を導入して3年が経過しており、本報告では、学生の技術試験に対する振り返りから、その教育効果を検証し、今後の課題を明らかにしたいと考えた。

2. 科目の位置づけと授業目標

本科目「フィジカルアセスメント」は、必修科目で、1年生後期（11月～1月）に開講される。1単位15回で、頭頸部・感覚器／呼吸器系／循環器系／腹部消化器系／脳・神経系／筋・骨格系というように6つに分け、項目ごとに講義と演習を実施していく。演習の内容は、臨床での実施頻度が高いと考えられる技術や、看護師国家試験出題基準項目を参考に、教員間で検討を重ね、その内容を精選している。

また、事例を示し、その患者に対して「どのような観察をするのか、観察した結果から何をアセスメントするのか」という思考過程にそって考え、フィジカルイグザミネーションおよび、看護におけるフィジカルアセスメントの意義や重要性を理解することを授業目的としている。

演習では、同じ学年の学生同士で患者役となることが多いが、呼吸器・循環器系のフィジカルアセスメントでは、シミュレーターを活用して演習している。一学年約90名であり、学生が一度に講義と演習を行い、基礎看護学領域の教員5名が担当している。

3. 技術試験の概要

頭頸部から筋骨格系までのすべての授業内容が終了した後、14・15回目に技術試験を行う。学生には、技術試験は単独の技術評価ではなく、対象に必要な観察は何かを考えて実施し、実施中の態度も評価される試験であることを初回の授業で説明している。そして、試験の約2週間前に具体的な課題内容(1)～(4)を説明している。

1) 技術試験の目的

フィジカルアセスメント技術と実施する上で必要な態度が、どの程度身に付いたかを確認する機会として実施する。

2) 到達目標

・事例について、対象に必要な観察は何かを述べるこ

とができる。

・事例の対象に必要な観察を実施できる。

3) 事例と試験前に学生に提示する内容

80代後半男性A. 肺炎で入院中。入院2日目13時、ナースコールがあり、「ちょっと息苦しくて」と話した。

・事例Aの「息苦しさ」の症状に対して、どのような問診とフィジカルイグザミネーションをするか、必要なフィジカルイグザミネーションの種類と、それをあげた理由を指定の用紙に記入し、自己学習をする。

・指定の用紙は、試験終了後に提出する。

4) 試験当日の進行

・「事例A」に実施すべきフィジカルイグザミネーションの中から指定された観察を実施する。指定する観察項目は、試験直前の試験ブースの前で紙面を見せて教員が伝える。紙面に記載されている内容を学生が把握しやすいように、「事例のAに対して～を実施してください」と箇条書きにしている。

・試験時間は5分間、評価者のフィードバック2分とする。学生1名に対して教員1名が評価し、5名の学生が同時に試験を受ける。試験ブース5つで、スクリーンで区切られ、他の実施者が見えないようになっている。また、試験前の学生と試験を終了した学生が接触しないように待機場所を分けている。

3. 技術試験の評価

評価内容については、患者に対する態度（病室入退時の挨拶、説明の仕方）、感染予防（手指消毒、医療機器の消毒）、安楽（聴診器膜面を温める）、聴診技術（聴診部位の正確性、1か所につき吸気呼気の聴取、左右交互の聴取、副雑音の判断）に分け、1項目1評価（計19項目）となるようにし、客観的評価が容易にできるようにしている。評価尺度は、成功度合いでA・B・Cの3段階に分け、声をかけてから病室に入ることができればA評価、声をかけずに病室に入ればC評価というように、どのような行動をとれば、その段階に該当するかという基準を設定している。そして、教員間で事前に打ち合わせを行ったうえで、この基準に基づいて評価をし、個人の試験終了直後にフィードバック（2分間）を行う。さらに、試験全体の終了後に、今回の課題に対するフィジカルアセスメントの解説を行う。

方法

1. 対象者

2019年度看護学部1年生の必修科目として開講する「フィジカルアセスメント」を履修し、成績評価が修了した88名の中で、研究の趣旨に同意が得られた者とした。

2. データ収集期間

2020年5月

3. 調査内容

分析に使用するデータは、授業終了後に授業評価の一環として収集した、本科目の技術試験に関するレスポンスカードとした。内容は、5段階評価で回答する選択式質問と「技術試験に関しての学習方法」、「技術試験についての全体に関する意見・感想」について、自由記述で回答を求めるものであった。選択式質問の具体的な内容は、“試験の難易度は適切だったか”、“試験時間は適切だったか”、“試験を受けるのは緊張したか”、“試験を受けるのは負担だったか”、“評価者のフィードバックは参考になったか”、“試験を受けて呼吸音を聴取することに自信がもてたか”、“今回の試験に積極的に取り組んだか”の7項目で、「強く思う」「そう思う」「どちらでもない」「そう思わない」「全くそう思わない」から、当てはまるもの1つの回答を求めた。

4. データ収集方法

研究の同意が得られた対象者のレスポンスカードからデータを収集した。

5. 分析方法

選択式質問項目については単純集計を行った。自由記述の回答については、記述された内容が忠実に残るように抽出しながら、内容ごとに類似するものをカテゴリー化した。分析の全過程において複数の教員で検討し、カテゴリーの妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

本研究は、岩手医科大学看護学部倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号N2019-18）。

1) 本科目の成績が発表された後、履修した学生にむけて、研究の趣旨・方法・倫理的配慮（参加は自

由意思に基づくもので成績に一切関係しないこと、データは匿名化し個人が特定されないようにすること、データは研究者が公表後5年間経過した後に電子データを破砕し、紙データはシュレッダーで廃棄すること、研究結果は看護に関する学会で論文発表をすること）を口頭で説明し、その後に記載した書面を2週間掲示した。

2) 研究に参加しないことを保証し、参加しない場合は指定の期日（書面の掲示終了から1週間後）までに、「研究不参加に関する書類」に記載して回収箱に提出してもらった。書類と回収箱はいずれも教員が居ない事務室に設置した。

3) 一度同意した場合でも撤回できることを保障するため、期日（研究不参加に関する書類の提出期限から3週間後）までに、「同意撤回書」に記載し、回収箱に提出してもらうようにした。

結果

同意が得られたのは、1年生86名（97.7%）であった。

1. 技術試験に関する選択式質問項目の結果（表1）

“技術試験の難易度は適切だったか”について、「強く思う」36名（41.9%）、「そう思う」43名（50%）、「どちらでもない」7名（8.1%）で、「そう思わない」「全くそう思わない」を回答したものは0名（0%）であった。

“試験時間は適切だったか”について、「強く思う」40名（46.5%）、「そう思う」44名（51.2%）、「どちらでもない」2名（2.3%）で、「そう思わない」「全くそう思わない」を回答したものは0名（0%）であった。

“試験を受けるのは緊張したか”について、「強く思う」64名（74.4%）、「そう思う」21名（24.4%）、「どちらでもない」1名（1.2%）で、「そう思わない」「全くそう思わない」を回答したものは0名（0%）であった。

“試験を受けるのは負担だったか”について、「強く思う」14名（16.3%）、「そう思う」38名（44.2%）、「どちらでもない」18名（20.9%）、「そう思わない」14名（16.3%）、「全くそう思わない」2名（2.3%）であった。

“評価者のフィードバックは参考になったか”について、「強く思う」67名（77.9%）、「そう思う」16

表 1. 技術試験に関する選択式質問項目の結果

項目	強く思う		そう思う		どちらでもない		そう思わない		全くそう思わない	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
試験の難易度は適切だったか	36	41.9	43	50	7	8.1	0	0	0	0
試験時間は適切だったか	40	46.5	44	51.2	2	2.3	0	0	0	0
試験を受けるのは緊張したか	64	74.4	21	24.4	1	1.2	0	0	0	0
試験を受けるのは負担だったか	14	16.3	38	44.2	18	20.9	14	16.3	2	2.3
評価者のフィードバックは参考になったか	67	77.9	16	18.6	3	3.5	0	0	0	0
試験を受けて呼吸音を聴取することに自信がもてたか	19	22.1	48	55.8	15	17.4	3	3.5	1	1.2
今回の試験に積極的に取り組んだか	60	69.8	26	30.2	0	0	0	0	0	0

n = 66

名 (18.6%), 「どちらでもない」3名 (3.5%) で、「そう思わない」「全くそう思わない」を回答したものは0名 (0%) であった。

“試験を受けて呼吸音を聴取することに自信がもてたか”について、「強く思う」19名 (22.1%), 「そう思う」48名 (55.8%), 「どちらでもない」15名 (17.4%) で、「そう思わない」3名 (3.5%), 「全くそう思わない」1名 (1.2%) であった。

“今回の試験に積極的に取り組んだか”について、「強く思う」60名 (69.8%), 「そう思う」26名 (30.2%) で、「どちらでもない」「そう思わない」「全くそう思わない」を回答したものは0名 (0%) であった。

2. 技術試験に向けた学習方法について

技術試験に関する学習方法について自由記述で回答を求めたところ、52件の回答があった。その内容は、「友人と協力しながら練習した」が23件と多く、次に「聴覚教材を利用して学習した」6件、次に「家族に協力してもらい練習した」3件という回答が中心であった。

3. 技術試験についての全体に関する意見・感想について (表 2)

技術試験についての全体に関する意見・感想について自由記述で回答を求めたところ、84件の回答があった。その中で12件は、実習室で練習する時間確保、試験日の変更希望など技術試験の運営に関する意見であり、それ以外の72件をカテゴリー化して内容を整理した。その結果、コードの多い順に【試験の緊張感】【看護実践能力の不足】【看護実践能力の向上に対する動機付け】【実践への自信の獲得】【課題の自

覚】【フィードバックが役立つ】【試験への後悔】の7カテゴリーが抽出された。なお、本文中では、【】はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリー、()はコード内容と数はコード数を示す。

【試験の緊張感】は、18コードと最も多いコード数で〈緊張したが実施できたことは良かった〉(9)、〈緊張したが褒められて嬉しかった〉(2)という肯定的な意見と、〈とても緊張した〉(7)であった。〈とても緊張した〉の具体的な内容としては、理由の記載はなく(とても緊張した)が4コード、(待機中緊張した)(個室で患者の対応も含めるため緊張した)(呼吸音を聴取しなければいけなかったので緊張した)が各1コードであった。

【看護実践能力の不足】は12コードで、〈聴診器の扱いができなかった〉(6)、〈呼吸音の判断が難しかった〉(3)、〈手指消毒ができなかった〉(2)、〈保温やプライバシーの保護ができなかった〉(1)の4つのサブカテゴリーに分類され、自分に何が不足していたのかが回答されていた。

また、【看護実践能力の向上に対する動機付け】も同じ12コードで、今後の目標が回答されており、〈呼吸音の判断ができるようになりたい〉(4)、〈確実にできるようにになりたい〉(3)、〈自信を持ってできるようにになりたい〉(3)、〈患者への声かけを積極的に行いたい〉(1)、〈解剖の知識が必要だと実感した〉(1)という5つの内容に分類された。

【実践への自信の獲得】は11コードで、〈試験を受けて自信がついた〉(7)、〈自分の取り組みが良かったと実感した〉(3)、〈副雑音を聞きとれたことは自信になった〉(1)の3つの内容に分類され、自分の観察技術に自信が持てたという内容であった。

【課題の自覚】は7コードで、〈できること・できな

表 2. 技術試験についての全体に関する意見・感想

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数
試験の緊張感	緊張したが実施できたことは良かった	9
	緊張したが褒められて嬉しかった	2
	とても緊張した	7
看護実践能力の不足	聴診器の扱いができなかった	6
	呼吸音の判断が難しかった	3
	手指消毒ができなかった	2
	保温やプライバシーの保護ができなかった	1
看護実践能力の向上に対する動機付け	呼吸音の判断ができるようになりたい	4
	確実にできるようになりたい	3
	自信を持ってできるようになりたい	3
	患者への声かけを積極的に行いたい	1
	解剖の知識が必要だと実感した	1
実践への自信の獲得	試験を受けて自信がついた	7
	自分の取り組みが良かったと実感した	3
	副雑音を聞きとれたことは自信になった	1
課題の自覚	できること・できないことを知れてよかった	5
	理解することと実行できることは別だとわかった	1
	状況に合わせた声かけが大切だとわかった	1
フィードバックが役立つ	フィードバックで改善点がわかった	3
	細かなフィードバックがよかった	3
試験への後悔	実施できないことがあって悔しかった	5
	勉強不足だった	1

いことを知れてよかった) (5), 〈理解することと実行できることは別だとわかった) (1), 〈状況に合わせた声かけが大切だとわかった) (1) の3つに分類され、自分の技術の現状を自覚できたという内容であった。

【フィードバックが役立つ】は6コードで、〈フィードバックで改善点がわかった) (3), 〈細かなフィードバックがよかった) (3) の2つに分類され、効果的なフィードバックであったという内容であった。

【試験への後悔】は6コードで、〈実施できないことがあって悔しかった) (5), 〈勉強不足だった) (1) で2つに分類され、悔しいという感情を表現した内容であった。

考察

1. 技術試験前の準備から得られる効果

この技術試験の目的の1つに自己学習の促進がある。そのため、学生には、初回の授業で技術試験の概要について説明し、試験の約2週間前に事例を含めた具体的な課題内容を示して、自己学習を促している。課題提示後に学生は、事例の症状に対して、どのような問診とフィジカルイグザミネーションをするかを考え、そのうえで、フィジカルイグザミネーション

を練習して試験に臨む。技術試験に向けた学習方法の自由記述では、「友人と協力しながら練習した」が一番多く、学生は自発的にグループ学習を行っていた。服部他 (2020) は、OSCEのように明確な課題を与えることで、主体的なグループ学習の効果も期待できると述べており、今回も技術試験に向けた取り組みを通してグループ学習が行われ、それが技術の習得に結び付いていると考えられた。

選択式質問の結果では、“技術試験の難易度は適切だったか”について、適切ではなかったとの回答はなく、「強く思う」36名 (41.9%)、「そう思う」43名 (50%) と適切だと感じている学生が約90%いた。この科目は、1年生後期に開講しており、2年生から疾病について学ぶ学生にとっては難しいことが予想される。しかし、授業の中で、患者に対して「どのような観察をするのか、観察した結果から何をアセスメントするのか」という、フィジカルイグザミネーション技術と統合して考えるように授業で取り組んでおり、このことが難易度の適切さにつながったと考えられる。

2. 技術試験から得られる効果

“試験を受けるのは緊張したか”の質問には、緊張しなかったとの回答はなく、約98%の学生が緊張したと回答していた。また、“試験を受けるのは負担だったか”という質問には、約60%が負担だったと回答しており、学生は緊張と負担を感じていることがわかった。自由記述の結果では、【試験の緊張感】のカテゴリーが最も多いコード数で、〈とても緊張した〉というネガティブな感情が残っている学生がいた。緊張した背景をみていくと、理由の記載はない(とても緊張した)が4コード、(待機中緊張した)(個室で患者の対応も含めるため緊張した)(呼吸音を聴取しなければいけなかったので緊張した)が各1コードであった。試験は区切られた空間で、制限時間内に実技を行う特異的なものである。また、あらかじめ指定した技術を実施するものではなく、対象に必要な観察を選択して実施するため、試験に対して緊張感を伴うことは否めない。しかし一方で、〈緊張したが実施できたことは良かった〉とポジティブに捉えている学生もいた。そして、他の結果でも“試験を受けて呼吸音を聴取することに自信がもてたか”という質問で約78%が自信につながったと回答し、自由記述でも、【看護実践能力の向上に対する動機付け】、【実践への自信の獲得】になったことが回答されていた。多賀他(2009)は、臨地実習に行く前の学生がOSCEに参加することは、患者を前にしたときの、緊張時の自己の傾向を探る良い経験の場になると述べている。また、三味他(2016)は、OSCEで実際に事例の対象者に対して援助を実施することは、臨地実習において対象を理解して援助を実施する責任感のある態度につながると述べている。これらのことから、今後実習を重ねていく1年生の時に臨床現場をイメージできる試験を行ったことは、緊張や負担を与えただけでなく、看護実践能力の向上につながる効果があったと考えられる。

フィードバックについて、“評価者のフィードバックは参考になったか”という質問の結果では、約96%が参考になったとの回答であった。また、自由記述の結果では、自己の課題を具体的に回答した【看護実践能力の不足】が2番目に多いコード数で、多くの学生が課題を回答していた。この結果は、評価者のフィードバックにより自己の課題が明確になり、その課題を受け入れている結果だといえる。試験のフィードバックの時間は、授業時間の都合上2分と

短い時間となっている。そのため、フィードバック時は、評価表に基づいた簡潔な改善策の提示を行うように教員間で話し合っていた。緊張状態にある学生がフィードバックされた内容を正確に振り返り、既知の知識と自己の行動とを結びつけるためには、フィードバックする内容の項目数を制限し、必要最小限にすると効果的だと言われおり(小園他, 2014)、教員間で意識して取り組んでいたことが効果的なフィードバックにつながったと考えられた。

試験の評価者は普段から演習を担当している教員であり、患者役はシミュレーターとしていることもあるため、緊張は和らぐことが予想される。しかし、今回の結果では、多くの学生が試験に対する緊張を回答している。小園他(2014)は、学生に対する緊張状態を緩和するための配慮と自尊感情への配慮は、学生が評価を受け入れやすい状態にすると述べており、今後も学生の心理状態に配慮したフィードバックを行っていく必要がある。

3. 今後の課題

今回の結果から、OSCEを活用したフィジカルアセスメント技術試験は、自己学習の促進と看護実践能力の向上につながる有意義なものであることが明らかになった。今後は技術試験をしたことが、実習での実践につながったかどうかを調査し、試験の効果を検証していくことが必要だと考える。

看護基礎教育検討報告書でも、看護師教育の基本的な考え方として「科学的根拠に基づいた看護の実践に必要な臨床判断を行うための基礎的能力を養う」ことが求められており(厚生労働省, 2019)、看護実践能力を育成する教育はますます重要となる。引き続き、学生への教育効果と教員の人的資源や学生と教員双方の準備時間など、バランス良い教育方法の構築に努めていきたい。

おわりに

今回、OSCEを活用したフィジカルアセスメントの技術試験に対する学生の振り返りを分析し、以下の結果を得た。

1. 選択式質問の中で、“技術試験の難易度は適切だったか”、“試験時間は適切だったか”、“評価者のフィードバックは参考になったか”、“試験を受けて呼吸音を聴取することに自信がもてたか”、“今回の試験に積極的に取り組んだか”は、「強くそう思

う」「そう思う」と回答した割合が高かった。

2. “試験を受けるのは緊張したか”, “試験を受けるのは負担だったか” は, 「強く思う」「そう思う」と回答した割合が高かった. 自由記述の結果でも【試験の緊張感】が一番多いコード数で, 多くの学生が緊張を感じていた.
3. 技術試験に向けた学習方法では, 「友人と協力しながら練習した」という回答が多く, 学生同士でのグループ学習を自発的に行い, 技術の習得に結び付いていた.
4. 技術試験についての意見は, 【試験の緊張感】【看護実践能力の不足】【看護実践能力の向上に対する動機付け】【実践への自信の獲得】【課題の自覚】【フィードバックが役立つ】【試験への後悔】の7カテゴリーに分類された.
5. OSCE を活用したフィジカルアセスメント技術試験への取り組みを通して, 目的であった自己学習の促進がされ, 看護実践能力の向上につながっていることがわかった.

引用文献

- 伴信太郎 (1995) : 客観的臨床能力試験—臨床能力の新しい評価法—, 医学教育, 26 (3), 157-162.
- 服部智子, 山本加奈子 (2020) : 実習前 OSCE 後の振り返りシートからみる学生自身が捉えた学び, 日本赤十字広島看護大学紀要, 20, 25-33.
- 堀込由紀, 及川秀子, 小西美里, 他 (2015) : 看護基礎教育における OSCE 導入に関する検討—全国看護系大学の OSCE 導入の現状調査—, 日本看護学

会論文集看護教育, 45, 47-50.

- 厚生労働省 (2019) : 看護基礎教育検討会報告書, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> [検索日 2020 年 2 月 10 日]
- 小園由味恵, 眞崎直子, 村田由香, 他 (2014) : 卒業前 OSCE フィードバック時の評価者による学生への配慮, 日本赤十字広島看護大学紀要, 14, 47-54.
- 文部科学省 (2017) : 「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」大学における看護系人材のあり方に関する検討会, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/fieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf [検索日 2020 年 2 月 10 日].
- 中村憲子 (2011) : 看護 OSCE, メヂカルフレンド社, 東京.
- 三味祥子, 吉田和美, 山本加奈子, 他 (2016) : 2 年次看護学実習前 OSCE をとおして臨地実習で実感した OSCE の学習効果, 日本赤十字広島看護大学紀要, 16, 89-97.
- 多賀昌江, 樋之津淳子, 福島眞理, 他 (2009) : 学生から見た客観的臨床能力試験 (OSCE) トライアルの意義, 札幌市立大学研究論文集, 3 (1), 27-34.
- 高井怜 (2014) : 海外の看護教育機関における OSCE (客観的臨床能力試験) に関する文献研究, 教育効果の報告に焦点を当てて, 日本看護学会論文集看護教育, 44, 248-251.

(受付年月日:2021年3月24日,受理年月日:2021年5月7日)

< Practice Report >

Approaches for Practical Examination of Physical Assessment Skill Using OSCE and Issues from Student's Perspective

Yukie Kashiwagi, Yumiko Kobayashi, Hitoshi Nozato, Miki Kosaka, Mayumi Miura
Iwate Medical University school of Nursing

Keywords : Nursing competency, Physical assessment, Objective Structured Clinical Examination (OSCE)